

漢詩の英訳による心情・情景のイメージの具体化の学習過程

西岡省吾*・片桐史裕**

(令和4年8月29日受付；令和4年11月9日受理)

要 旨

高等学校国語科古典Aの漢詩「江雪」を英訳する活動を行った。学習者は漢詩を英訳する上で、大きく分けて4つの着目過程を用いて学習していることが分かった。その4つとは「単語着目」、「意味着目」、「主語着目」、「語順着目」である。10名5ペアで学習していた会話分析と翻訳分析の結果、その4つの着目過程が生起しており、英訳することにより、漢詩に表現された情景、心情のイメージを具体的に獲得していくことが明らかになった。

KEY WORDS

国語、漢詩、古典、英訳、翻案

1 はじめに

文部科学省(2009)は、「平成21年改訂高等学校学習指導要領」で、古典Aの目標を、「古典としての古文と漢文、古典に関連する文章を読むことによって、我が国の伝統と文化に対する理解を深め、生涯にわたって古典に親しむ態度を育てる。」と示している⁽¹⁾。この「古典に親しむ態度を育てる」という点に着目すると、戸田(2020)は、「漢詩の深遠さを理解して楽しんだり、さらに、現在の文化や感性、自身の体験などと照らし合わせて、自身の理解や世界を広げていったりする」という点に漢詩を学ぶ意義があると述べている⁽²⁾。だが、実際に行われている漢詩の授業について三島(1998)は、「漢詩の決まり(とりわけ近代史における)と訓読、そして解釈に終始し、いきおい作者の立場、作詞の背景を概略することで事足りれりとする授業が展開しがちである。」と懸念を示している⁽³⁾。現状として漢詩の授業は、解釈重視の授業が展開されるばかりに、先の戸田の言うところの「漢詩の深遠さを理解して楽しみ、自身の理解や世界を広げていく」という漢詩学習本来の意義が失われていることが分かる。このことは、漢詩学習のみならず、古典学習全般に言えることだろう。

一方、このような古典学習を改善する実践も行われている。畠山(2019)は、徒然草を英訳する実践を行い、「古文、現代日本語、英語と行き来することで理解が深まる部分」があると、生徒の英訳及び振り返り記述をもとに述べている⁽⁴⁾。このように授業改善として古典を英訳する活動も現れている。

学習者が英訳する時の学習過程について、文部科学省(2018)は、平成30年度告示「高等学校学習指導要領解説英語編」において、外国語で表現し、伝え合うためには、「適切な言語材料を活用し、思考・判断して情報を整理するとともに、自分の考えなどを形成し、再構築する。」と示している⁽⁵⁾。また、日本学術会議(2012)によると、「訳す」という行為は、起点言語のテキストを理解し、解釈し、それを目標言語で表現することであると述べている⁽⁶⁾。

このように、日本語を英訳する活動では、英訳される文章の「情報整理」、「理解」、「解釈」、自分の考えの「形成」、「再構築」などという思考の働きが生まれるということが分かる。

英訳で行われる情報整理、理解、再構築などの学習で、学習者が何に着目して英訳しているのか(以下、「着目過程」)は、先行研究から、大きく分けると「単語着目」、「意味着目」、「主語着目」、「語順着目」の4種類になる。以下、それぞれを説明する。

①「単語着目」羽瀧(2003)は、第一言語と第二言語の間で翻訳が行われる際、「学習者は通常文や文章を一方の言語から他方の言語へ翻訳することが多いが、その際に基本となるのは、そこで使われている単語の翻訳である。」と述べており、単語に着目しながら英訳をしていることが分かる⁽⁷⁾。この英訳の過程を「単語着目」と呼ぶことにする。

②「意味着目」後藤(2014)は、英語の語彙を学習するにあたり、「単語がどのような意味を持ち、同じような意味を持つ単語とどのような関係にあって、どのように使い分ける必要があるのかといった知識を身につけることが必要

*宮城県立宮城野高等学校 **学校教育学系

である」と述べている⁸⁾。英訳時に単語のどの意味が適切かを選ぶ過程を「意味着目」と呼ぶことにする。

③「主語着目」 福島(2010)は、英文作成の際、「主語の選択が、(中略)英文全体の文法性まで及ぼすため、主語の選択を特に留意させる指導を行う必要がある。」と述べており⁹⁾、英訳をする際には主語に着目することが重要であると考えられる。このように、主語を意識的に選択している学習過程を「主語着目」と呼ぶことにする。

④「語順着目」 秋山・百武ら(2007)は、「英語では文の解釈に不可欠な各構成要素の意味関係は主に語順によって示される。」と述べており¹⁰⁾、英語の語順の重要性を述べている。英訳時に語の順番を考えている過程を「語順着目」と呼ぶことにする。

古典授業において古典作品を英訳する実践報告はあるものの、その効果は、アンケート調査や、テストの点数の比較の調査のみで、学習者の英訳過程の会話記録による詳細な分析や、漢詩の英訳過程において、どのような着目過程で行っているのか、また、学習者はどのように漢詩の心情・情景の具体的なイメージを生起させているのかを明らかにした研究は見当たらない。

2 本研究の目的

古典授業にて漢詩を英訳する活動を行い、一般的な日本語の英訳での「着目過程」が漢詩の英訳でも現れるのかどうか、また、現れるとしたらどの「着目過程」によって漢詩の心情・情景のイメージを具体的に理解していくのかを分析する。

3 調査

3.1 目的

漢詩を英訳する際の学習者の発話記録を分析し、英訳結果と照らし合わせることで、一般的な英訳での「着目過程」が漢詩の英訳でも現れるのかどうか、また、現れるとしたら、どの「着目過程」によって漢詩に表されている心情・情景のイメージを具体的に理解していくのかを分析する。

3.2 調査方法

調査対象 新潟県立高校3学年「古典A」選択者10名(5ペア)
実践科目「古典A」単元「江雪」柳宗元(2時間)

《原文》	《書き下し文》
千山鳥飛絶	千山鳥飛ぶこと絶へ
万径人蹤滅	万径人蹤滅す
孤舟蓑笠翁	孤舟蓑笠の翁
独釣寒江雪	独り釣る寒江の雪

単元計画 1時間目にペアで既習の漢詩「江雪」を英訳し、2時間目に作成した英訳を発表した(全5ペア)。なお、英訳する際には辞書等で検索してもよいことにした。

記録方法 ペアの英訳活動での会話をICレコーダーで記録し、クラス全体をビデオカメラで録画した。

4 分析結果と考察

4.1 調査方法

漢詩を英訳する際の発話記録や、英訳結果から、英訳する(英単語を選んでいく)過程で現れた着目過程は、漢詩で表されている心情、情景のイメージをより具体化していく「英訳による漢詩の内容理解の学習過程」と、漢詩で表されている心情、情景に合致する英訳をする「漢詩の内容を理解し、英訳に反映させる学習過程」の2つに分けられた。

4. 2 英訳による漢詩の内容理解の学習過程

漢詩の英訳学習において、「単語着目」、「意味着目」、「主語着目」の3つのカテゴリーが漢詩の内容理解のために現れていた。

4. 2. 1 単語着目

表1 「万径人蹤滅」の英訳会話記録

A: 「人蹤」, 人の足跡だよね 「human's」 いる? 「human's footprint」。
 B: いらんくね, あーでもいるかもしれない。
 A: これだとただの足跡になるよね, 獣でもいけちゃう。
 B: 「蹤」が足跡だから「人」を補わなくちゃ。

表1は「人蹤」について英訳をしている際のものである。「人蹤, 人の足跡だよね human's いる? human's footprint。」という会話から「人蹤」を「人の足跡」と現代語訳し, そこから「human's footprint」と英訳している。また, 「蹤が足跡だから人を補わなくちゃ。」から, 「人」を「human's」, 「蹤」を「footprint」と解釈している。

漢詩を現代語訳し, 現代語訳を英訳し, そこから文を組み立てている。これは一般的な英訳過程である。全5ペア全てにこのカテゴリーが見られ, 基本的に「漢詩の解釈→現代語訳→英訳」という過程で英訳を行っていた。

4. 2. 2 意味着目

表2 「千山鳥飛絶」の英訳会話記録

C: 滅すってどうする?
 D: 消滅。
 C: なく, なくなる, 消える。
 D: 「消える」で調べよう。
 C: 消える, あーこれどれ。
 D: 姿? 姿あー違う。
 C: 成功への希望は消えてしまった。
 D: 何それ。
 C: どれだと思う? 「went out, dis」なんとか。
 D: 視界から消える, え, 視界から消えるではないでしょう。
 C: 見えなくなるってこと?
 D: ろうそくが消える, 「went out」, じゃあ, 「dis なんとか」かなあ。
 C: 物が消えるってないのかな。
 D: なんで英語ってこんな種類あるの? 日本語は1つだよ。
 C: 見えなくなるにする? 見られなくなる, 他のところでは見られない的な。

表3 「千山鳥飛絶」の英訳

The flying birds have disappeared from the all mountains.

表2の発話記録から「千山鳥飛絶」の「絶」を「消える」と解釈し, 「消える」という英単語を探している様子が分かる。その後に英単語の中でどの「消える」が漢詩の心情・情景を表現するにふさわしいかの吟味を行っている。

また, 「消える」という英単語がたくさんあり, 日本語は「消える」だけであらゆる「消える」を表すのに, 英語は「消える」という意味だけでもたくさん単語があるという英語と日本語の違いに気付いている。そして, 「視界から消えるではないでしょう。」という発話から鳥がただ視界から消えるのではなく, 時間の経過とともに, だんだんと消えていく様子まで想像している。「見えなくなるにする?」という発話から, 「消えていく」という意味の「disappear」を単語として用いたことが表3の英訳より分かる。日本語が意味する言葉の範囲と, 英語が意味する言葉の範囲が違うからこそ, このような学習過程が生じたと考えられる。このカテゴリーは5ペア中, 4ペアで見られた。

表4 「万径人蹤滅」の英訳会話記録

E: 「road」と「way」どっちがいい?
F: そこは調べて。
E: えっとね、まず「road」っていうのは「人や車などが交通するために整備された道」だって、じゃ「way」でいいや。
F: 整備されてなくていいんだ。
E: 整備されてないよねたぶんね、「way」は「目的地に到達するために行く行き方」。
F: あ、行き方、道のりみたいな感じかそれ。
E: んとね、どっちへ行ったらいいかわかんないんですが「way」。
F: あー目的が。
E: 「こちらです」、が「way」。
F: それは手段なんだ。
E: 単語としてさ、道っていう単語としてさ、やるんだったら「road」の方がいいかもしれないね。
F: うん、「road」なんだね。
E: あのさ「way」の例文みたら「road」の例文も見たい。普通英語ではこういう文では「road」って使うんだと思う、ほかにも「path」がありますだって、あ、「path」の方がよくない? 「 <u>小道、獣道</u> 」だって。
F: あ、いいじゃん、それにしようぜ、 <u>んじゃここ「path」にしよう。</u>
(中略)
E: 「path」で調べてみよう、普通にパスって出てきたんだけど、「道筋、通り道」。
F: 「獣道」ってあった?
E: 「path」とは、えー、 <u>あんま「path」って言わないのかも。</u>
F: あーたしかに。
E: 「path」さ、あんま言わないのかもしれない、「path」とは、って調べてもひっかかんない、「road」でいいよ「road」で。

表5 「万径人蹤滅」の英訳

Human's footprints aren't in 10 thousand of the road.

表4は、「万径人蹤滅」の英訳場面である。「径」の英訳について「道」という解釈をしている。また、この詩で用いられている「道」は、獣道や小道といった舗装されていないような「道」を表していることが「整備されてないよねたぶんね。」という会話や「小道、獣道だって。」という発言から窺える。また、「roadとwayどっちがいい?」という会話からは、「road」と「way」の指す意味がそれぞれ違うということを理解している。また、どの英単語を用いるのが適切かという会話を通し、「path」という英単語がふさわしいと辿り着いているが、「path」という英単語は、一般的にはあまり使われていないことを知り、「road」を用いた英訳にした(表5)。

表2、表4の会話記録から、漢詩を英訳することにより日本語が示す言葉の範囲と、英語が示す言葉の範囲の違いについての気づきを得て、言葉の範囲を絞り、より具体的なイメージを得ていることが分かる。

4. 2. 3 主語着目

表6 「孤舟蓑笠翁」の英訳会話記録

G: 「孤舟」ってさ。
H: うん、「一人舟」ってことじゃない?
G: 一人舟。
H: ううんたぶん。
G: 「孤舟」の「孤」ってさ、 <u>なんか舟をさ、修飾してるのかなって思ったんだけどそこは訳の違いだね。</u>
H: うーん、舟が孤立してるってこと? 一人で乗ってるじゃなく?
G: まあ、一人で乗ってるんだらうけど。
H: <u>周りにこのじいさん以外で乗ってる人はいないかもってこと?</u>
G: そう思ったんだけど、まあ気にしないでくれ。

表7 「孤舟蓑笠翁」の英訳

An old man wearing a straw rain cape and bamboo hat rides on one boat.

表6は、「孤舟蓑笠翁」の句についての発話である。「孤舟の「孤」ってさ、なんか舟をさ、修飾してるのかなって思ったんだけどそこは訳の違いだね。」や、「周りにこのじいさん以外で乗ってる人はいないかもってこと？」から、「孤」がおじいさんを修飾していて、一人という意味を表しているのか、「孤」が舟を修飾していて、「たった一つの舟」という意味を表しているのかを話し合っている。つまり、「舟」を主語にする場合は、「たった一つの舟」に「翁」が乗っているが、他の人も乗っている可能性があること、「翁」を主語にする場合は、舟には「翁」が一人であるが、周りに舟がある可能性があるというように意味が異なるという気付き、英訳で漢詩の中のどの言葉を主語にするかによって、文の印象や意味が異なってくると気づいている。表7の「孤舟蓑笠翁」の英訳を見ると、「An old man one boat」と表現しており、「孤」が「翁」と、「舟」のどちらを修飾しているのかについて、片方だけではなくどちらをも修飾していると理解し、表現していることが分かる。

表8 「千山鳥飛絶」「万径人蹤滅」の英訳会話記録

I : 「There are no birds flying in all the mountains.」間違っていないよね？
 J : これはこれでいいと思うんだよな。
 (中略)
 I : 全ての山々と全ての道かあ。
 J : でも一緒なんじゃない？鳥の前まで、単純にいけばね。
 I : 単純に考えれば一緒だよな。
 J : 「人間の足跡は全ての道で消えました」、んー。
 I : そっち主語にしちゃったかー。
 J : 人間が主語になっちゃうのか。
 I : 「人の足跡」じゃなくて「足跡」でいい？
 J : 「足跡」にしてしまう？「動物の足跡」でもでちゃうけど。
 I : それはなあ、人が主語になるんだね。
 J : 「There are」でやりたいよね。
 I : 一緒にする？同じ感じの句だし「There are no 足跡」でやってみるか。

表9 「千山鳥飛絶」「万径人蹤滅」の英訳

There are no birds flying in all the mountains.
 There are no footprint in all the road.

表8は、「千山鳥飛絶／万径人蹤滅」を英訳している際の会話記録である。「千山鳥飛絶」を漢詩の語順通り英訳した後、「万径人蹤滅」を英訳しようとしているが、「一緒なんじゃない？」という発話から「千山鳥」と「万径人」が対応していることに気付いている。そして、人が主語になることに対して「そっち主語にしちゃったかー。」「There are でやりたいよね。」「一緒にする？」という発話から、直前の句と対句にするために、前の句の英訳と同じに形式主語 (There) がふさわしいと考えている。英訳は「There are no ~」という構文で二つの句を英訳している (表9)。

4. 3 漢詩の内容を理解し、英訳に反映させる学習過程

漢詩の英訳学習において、「語順着目」のカテゴリーが漢詩の心情・情景のイメージ再現のために現れていた。

4. 3. 1 語順着目

表10 「千山鳥飛絶」「万径人蹤滅」の英訳会話記録

K: これって文法通りにやった方がいいかな?
 L: 文法通りっていうのは?
 K: これは文法通りにいけば「mountain」は最後になるのか、英語って後ろから訳すっていうもんね。
 L: なるほど、あ、そっちの方が表現しやすいのかな、これ（「鳥飛ぶこと絶え」）を先に言うんでしょ?
 K: どこでを先に言いたいというか、英語だとそうなのかなって、そっちの方が分かりやすいのかなって思う、自然な感じ。
 L: んー、「人蹤滅す、万径」みたいな感じがいいのかなあ。
 K: 「千山鳥飛絶」、あーでもこっちのほうがいいのかな、詩のそのままって感じで。
 L: 「the all mountain」, 「was」, なんだこれ、絶える, 「bird flying」。

表11 「千山鳥飛絶」, 「万径人蹤滅」の英訳

Birds don't fly in thousand of mountain.
 The all small track has destroy human print.

表10から、「千山鳥飛絶／万径人蹤滅」を英訳する際の語順を考えている場面が見られた。英語を日本語に訳す際は後ろの「鳥飛絶」から訳していった方がいいのか、また、漢詩を英語で表現するために英訳においても「千山」を先の語順にした方が良いのかについて話し合っている。そして、「mountain は最後になるのか、英語って後ろから訳すっていうもんね。」「英語だとそうなのかなって、そっちの方が分かりやすいのかなって思う、自然な感じ。」から、漢詩の中の後ろの語を先頭に持ってきて英訳した方が分かりやすいと考えている。しかし、その会話の後に、「千山鳥飛絶、あーでもこっちのほうがいいのかな、詩のそのままって感じで。」という会話から、漢詩の語順そのまま英訳した方が、漢詩で表している心情・情景のイメージを英語で表現するのにふさわしいという気付きを得ている。表11の学習者が実際に行った英訳を見てみると「千山鳥飛絶」の漢詩の語順で英訳しており、漢詩の語順を意識しながら英訳を行っている。漢詩の雰囲気を読み取り、それが英語に反映されるように訳そうという意図が見える。

表12 「千山鳥飛絶」の英訳会話記録

M: 「山川は存在したまんまいる」的な感じなのかな?
 N: いや、でもまって、これ先に飛ぶ方がいいのかな、鳥が飛ぶことが絶えてる「in thousand」的な。
 M: あーそっちか。
 N: そっちのほうがいいかもしれない。
 M: どっちを主語にするかだよな、うん、「鳥が絶えたこと」をメインにした方がいい。
 N: この感じだと「鳥が山で絶えてること」か、じゃあさっきでいい?
 M: えーどうしよ、どっちがいい?
 N: 鳥が飛んでないんでしょ?
 M: そうだね。
 N: 鳥が飛んでない、「in thousand mountain」の方がいい?
 M: うん。
 N: いきなり「birds」でいっていいんだっけ?
 M: いんじゃね。
 N: いや「絶えた」、かこれは。
 M: 飛んでないの? いや簡単にしよ。
 N: 「birds flying」にしちゃう? あってる? 文法的に?
 M: えーわからん。

表13 「千山鳥飛絶」の英訳

The all mountain has bird flying become extinct.

これ（表12）も語順が話題になっている。「千山鳥飛絶」について「鳥が飛ぶことが絶えてる in thousand」の語順の方がいいのではないかという会話が見られた。「どっちを主語（＝先：著者注）にするかだよな、うん、鳥が絶え

たことをメインにした方がいい。」という会話から、「山で鳥が絶えている」という山が先にイメージされる解釈か、「鳥が山で絶えている」という鳥が先にイメージされる解釈の、2つの解釈があることに気付いている。そして「いきなり birds でいいんだっけ？」より、「鳥が山で絶えている」の方を選び、「鳥」を文の先頭に持ってこようとしている。しかし、この後、「いや絶えた、かこれは。」から「鳥が飛んでいない」のではなく「山で鳥が消えたという」解釈もできるという気付きを得て、「山」を表す英単語を先に持ってくるべきだという考えに至っている。表13はその英訳である。

5 結論

漢詩を英訳する活動の学習過程を、会話記録、英訳から分析した。その結果、一般的な英語授業時の日本語英訳過程に表れる着目カテゴリーが全て表れた。そしてそれらにより漢詩の心情・情景をより具体的にイメージできるようになった。また、英訳によって漢詩の内容理解を進めていく「単語着目」、「意味着目」、「主語着目」と、漢詩で表されている心情、情景を表現する英訳を作っていく「語順着目」に分類することができた。また、この活動により、漢詩で表された心情・情景を具体的にイメージしていくことが明らかになった。

6 今後の課題

古典英訳の効果は、漢詩だけではなく、他の漢文、古文理解の有効性も示していく必要がある。また、今回の会話記録には表れなかったが、漢詩を英訳する際に文字として表現されていないことにも着目し、言外の情景を読み取り、それを英語によって表現している事例が見られた。今後、それについても分析する必要がある。以下の表14はその事例の英訳である。

表14 「千山鳥飛絶」、「万径人蹤滅」の英訳

<p>The birds is no longer fly in all mountains. The human footprints disappeared on all roads.</p>
--

「no longer」(もはや～ない)という単語を用いており、かつて鳥は飛んでいたが、今はもう消え去っているという様子を表している。つまり、ただ鳥が消えたのではなく、越冬のためにかつていた場所から違う場所へと飛び立たと解釈し、漢詩には文字として表されていない「行間」の情景を捉え、英語で表現している。今後、この、「漢詩に文字として書かれていない内容までを理解し、英訳に反映させる」学習過程に含まれると思われる「言外着目」というべき事例の分析を進める必要がある。

【引用及び参考文献】

- (1) 文部科学省：「高等学校学習指導要領解説 国語編」, p.56, 2010.
- (2) 戸田康代：「国語総合 意欲的に漢文を学習する態度を涵養する授業の試み—杜甫の漢詩を題材にした高大連携授業の実践—」, pp.13-20, 『愛知教育大学附属高等学校研究紀要第47巻』, 2020.
- (3) 三島徹：「教材としての漢詩：漢詩史からの試み」, pp.149-155, 『名古屋大学教育学部附属中高等学校紀要第43巻』, 1998.
- (4) 島山俊：「日本語の特質を考える—古文を英訳する作業を通して—」, pp.125-142, 『お茶の水女子大学附属高等学校研究紀要64巻』, 2019.
- (5) 文部科学省：「高等学校学習指導要領解説 英語編」, p.15, 2018.
- (6) 日本学術会議：「大学教育の分野別質保証のための教育課程編集上の参照基準 言語・文学分野」, pp.7-19, 大学教育の分野別質保証推進委員会言語・文学分野の参照基準検討分科会, 2012.
- (7) 羽瀨由子：「上級の第2言語学習者における単語の翻訳処理過程—日本語—英語間での改訂階層モデルの検討—」 pp.65-75, 『教育心理学研究51巻』, 2003.
- (8) 後藤由佳：「英語語彙の意味範囲に関する不十分な理解とその修正」, pp.1-12, 『教育心理学研究62巻』, 2014.
- (9) 福島知津子：「高校生による自由英作文において頻出する誤りに関する研究—主語の選択と文法性の関係に焦点を当てて—」, pp.45-54, 『四国英語教育学会紀要第30号』, 2010.
- (10) 秋山沙緒里・百武玉恵：「英語同類要素の語順に関する考察」, pp.113-124, 『紀要visio第36号』, 2007.

By what kind of learning process does the learner portray the scene by translating Chinese poetry into English?

Shogo NISHIOKA* · Fumihiko KATAGIRI**

ABSTRACT

I gave a lesson to translate the Chinese poetry “Kosetsu” in the high school “Japanese language classic A” course into English. Learners mainly used four focused processes to translate Chinese poetry into English. The four processes were “word focus,” “meaning focus,” “subject focus,” and “word order focus.” Because of conversation analyzes and translation analysis that were learned by 10 people in 5 pairs, the four focused processes emerged. By translating into English, it became clear that the learners would concretely acquire the image of the scene and emotions expressed in Chinese poetry.

* Miyagino High School, Miyagi Prefecture ** School Education